

## 「土壌学・微生物学的」発想のすすめ

寺 岡 寛  
(中 京 大 学)  
(経 営 学 部 教 授)



### 土のこと

高齢化はガーデニング市場を拡大させた。人びとは土に親しむ。だが、私たちは土のことをどれほど知っているのだろうか。『奇跡のりんご』という本がある。青森のりんご農家・木村秋則氏のりんごづくり体験を描いたものだ。同氏が作家の石川拓治氏相手にりんごと土壌との関係を語った『土の学校』という本もある。

この本で木村氏は、土には「良い土」と「悪い土」があるとする。無農薬・無肥料の失敗続きのりんごづくりで「山の土が答えなんじゃないかと思って・・・そのときツーンとするいい匂いがした」と振り返る。「土」とは自然の命をはぐくむ母体だと言う。

木村氏の「良い土」とは土中の無数の微生物たちがつくる。微生物は生物の腸内にも棲み、免疫力を維持する。腸内細菌の環境が悪化すれば健康も損なわれる。木村氏は「奇跡のりんご」を育てた「土の豊かさ」とは「肥料分ではなく、そこで活動している微生物と、植物の関係で決まる」と指摘する。

木村氏は化学肥料と農薬ばかりに頼り、土と微生物との関係が忘れられてしまったことを嘆く。土と土壌は根本的に異なる。土壌は動物や微生物が土中有機物を加工・分解することでつくられる土のことだ。

これを忘れて、足りなければ肥料を足せばよい。害虫がくれば農薬を散布すればよい。これではダメだ。肥料と農薬で土壌そのものが枯れていく。同時に、土壌を豊かにする微生物も枯れる。これでよいのか。「土」と「土壌」の間にはパラドックスがある。

### 人を育てる土壌

日本農業の経営規模は小さい。中山間地域にある耕地も多い。高齢者にとって耕作はたいへんだ。日本農業を担う人たちの6割以上の方はすでに60歳代半ば以上である。日本農業はどうなるのだろうか。

若い人たちがすぐに農業知識や農業技術を身につけられるはずもない。そこには熟練・熟達の人たちからの技術・知識・体験移転が必要だ。なにごとにも基盤が必要。農業では作物が強く育つには土壌が決定的な要素である。

農業だけの話ではない。すべての産業には担い手、とりわけ、興味・熱意をもつ若い人たちが肝要である。人の育成にも「土壌」が要る。

地場産業や中小企業などでの人材育成でも、土壌学的発想は有効だ。作物は養分を与え過

ぎでもダメ。害虫にもすぐに農薬もダメ。作物＝人材と置き換えればよい。若い人が困難な問題に直面しても、すぐに助け舟を出さない。自分の力で乗り越える意欲をまずもたせる。チャンスを与え過ぎてもダメ。徐々に与えること。失敗しても何でもチャンスを小刻みに与える。これにより若い人はだんだんと遅くなる。そうした企業風土こそが土壌である。

世界の農地を調査してきた土壌学者の久馬一剛氏も『土とは何だろうか?』で「物質としての土であっても、植物生産の培地としての土壌と呼べるであろうか」として、土を土壌へと「換える」には、土地のなかの有機物を加工・分解してくれるミミズなどの土壌動物や微生物が重要だと強調する。

中小企業などのベテラン社員などを微生物に例えると、お叱りをうけそうだが、そのような人材がつぎの世代を育む土壌となり「奇跡のりんご」のような次世代人材を生み出していく。

### シューマツハ再論

『スモールイズビューティフル』（小島・酒井訳・1973年刊）は日本でもよく知られた著作だ。多くの方は中小企業経営やあまりお金をかけない中間技術論に引き寄せて、この著作を覚えているかもしれない。

だが、著者のドイツ人（英国籍）シューマツハがエネルギー分野の大組織の経営者であっただけでなく、土壌学者でもあったことは知られていない。第二次大戦中は、彼は英国在住・敵国ドイツ人として収容所送りとなった。一時期、農作業員として日々を過ごすうちに土壌づくりへの興味をもったはずだ。

その発想の根幹に、土壌学や微生物学への深い造詣があった。これを念頭に置けば、この著作が単に中小企業経営を論じたものでないことがわらう。彼の真のメッセージとはつぎのようなものだ。

①だれしも自然環境を意識すれば、なにごとにも「限界」があり、「限界を踏み越えれば、悪となり、害を及ぼすことになる」、②そもそも「経済学とは人間を環境ぐるみで取り扱う学問である」こと、③土地も生産だけのための要素としてみてはならないこと。この土壌学的発想から導き出されたのは「再生不能資源を浪費せず」「エコロジーの法則にそむかず」「希少な資源を浪費せず」の3原則である。

この3原則に基づくのがシューマツハ経済学「スモールイズビューティフル」ではなかったらうか。中央集権化に対して地方分権化、大規模組織に対してみんなの顔が見え、無駄を省ける小さな組織単位が重視された。いま、グローバル化のなかで食の安全・安心が大きな関心と呼ぶ。いずれも大規模組織ではわからない。小規模組織だからこそ商品とサービスが目に見えるのである。

私たちの周りにある中小企業は土中の微生物である。喩えが悪いが重要なのである。ちなみに、私の大学時代の専攻は微生物学（生化学）で、むろんこの言い方に若いころから偏見はない。中小企業は単なる土ではなく、次世代の人を育て、わたしたちの地域社会を良くしている「土壌」たるべきである。大企業に関わって、社会的事業論や社会的責任論が強調された。企業活動はすべからず社会的事業であり、社会への貢献が大事である。中小企業はその基盤を担う地域の大事な存在なのである。決して軽視してはならない。